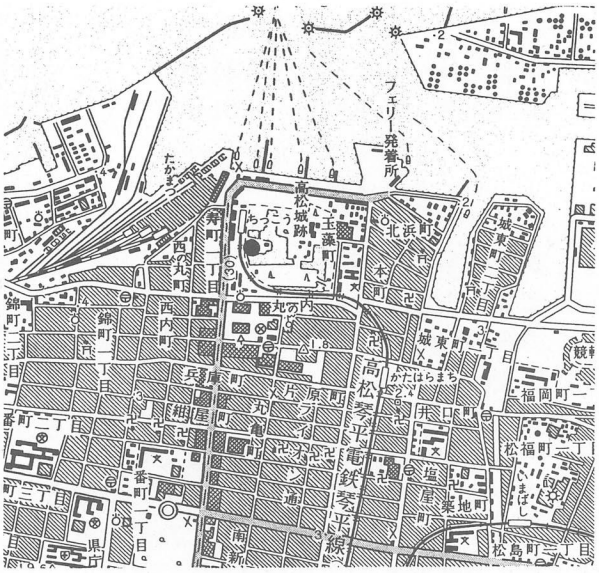
史跡高松城跡地久櫓台

1．所 在 地　高松市玉藻町
2．調査主体　高松市教育委員会
3．調査期間　平成11年10月25日～11月26日
4．調査面積　88㎡
5．調査担当者　川畑　聰
6．調査の原因　地久櫓台解体復元
7．調査結果の概要

史跡高松城跡地久櫓台は、石垣の孕みが著しく崩壊が懸念されるため、平成11年度より８か年計画により、櫓台の解体・復元工事を文化庁国庫補助事業として本市が実施している。櫓台解体に伴い、発掘調査を実施したものである。

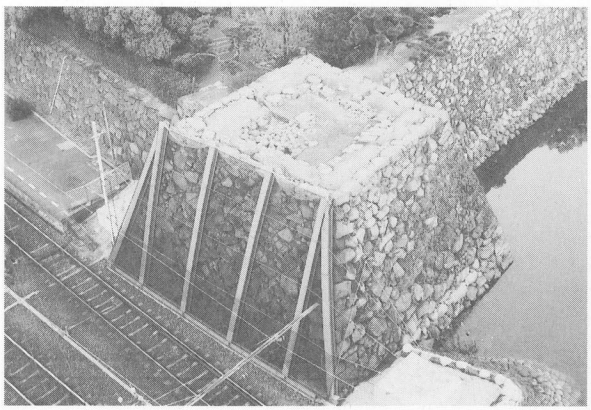


第１図　遺跡の位置（「高松北部」）

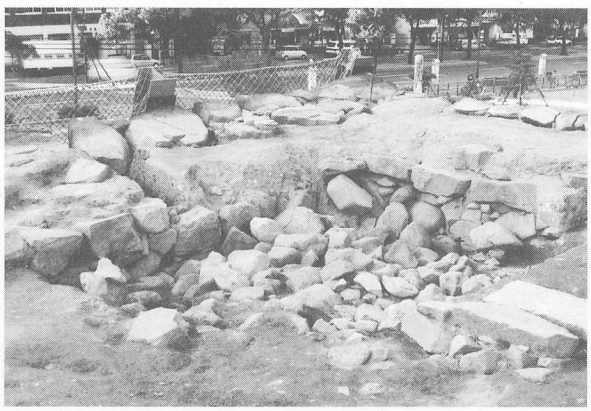
今年度の解体工事は、石垣１段目のみであるため、調査は櫓の礎石等の検出および石垣上面の確認を目的とした。現況では、櫓台の中央付近が石垣上面より20～30㎝高く盛り上がっていた。表土層（現代攪乱層）を除去したところ、約５ｍ四方の平面をもち、深さ約50㎝を測る窪みを、櫓台中央で検出した。窪みの最下層より昭和26年鋳造の５円硬貨が出土したことより、戦後しばらくまで櫓台中央が窪んでいたことが明らかになった。窪みを形成している浅黄色極細砂粘質土は、漆喰を多く含むが、この特徴は高松城跡周辺の発掘調査では、江戸時代後期～明治時代にかけて見られるものであり、今回確認した櫓台の最終形成が当該時期にあたる可能性が高い。また、窪みの四方より内側に平坦面を揃えた石列を確認した。この石列は、確認できるだけで３～４段あり、下方に向けてさらに続くと考えられる。

8．まとめ

今回の調査により、戦後しばらくまで地久櫓台上面に窪みがあったこと、櫓台上面の最終形成時期が江戸時代後期～明治時代であることがわかった。平成12年度以降の調査については、窪みの四方より内側に平坦面を揃えた石列について、その性格を把握したい。　（川畑）



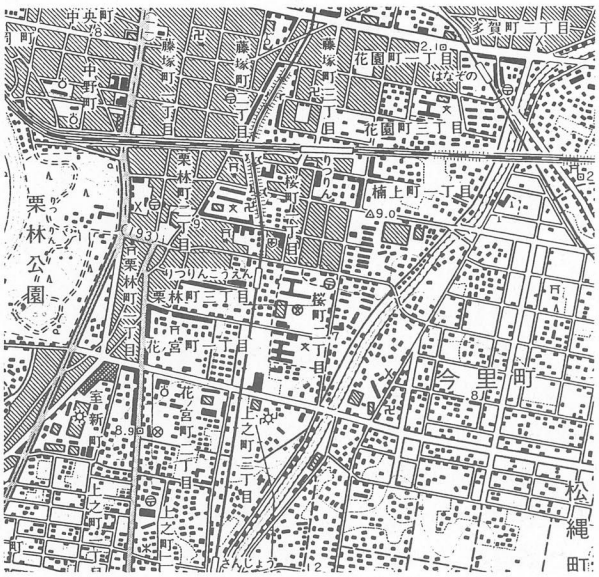
第２図　櫓台全景（調査後）



第３図　石列

東中筋遺跡（ひがしなかすじいせき）

1．所 在 地　高松市桜町
2．調査主体　高松市教育委員会
3．調査期間　平成11年11月17日～12年１月31日
4．調査面積　1,245㎡
5．調査担当者　小川　賢、中西克也
6．調査の原因　都市計画道路東浜港花ノ宮線建設
7．調査結果の概要



第１図　遺跡の位置（「高松南部」）

調査地は高松市立桜町中学校の南西側に位置し、現況は市街地の中に残る水田である。

弥生時代では南端部において３基の土坑を検出した。時期は前期末である。平面形は楕円形を呈し、底面直上より完形の壺・甕が出土した。また、後期の遺構として、26基のピットが検出された。

古墳時代後期では溝３条を検出した。溝は南端にあり、その方向は南西一北東である。

近世では南東隅に掘立柱建物跡１棟と北側と南側に15基のピットを検出した。掘立柱建物跡は３間以上×１間以上の規模で、柱材の一部の残存する柱穴があった。

現代では、昭和20年の高松空襲の際に投下された焼夷弾の一部（重り）が現水田から約１ｍの深さまでめり込んだ状態で検出された。

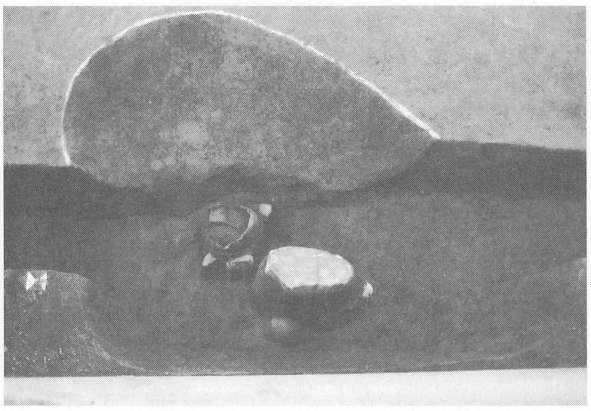
自然旧河道は30ｍの幅を測り、調査区を南西一北東方向に横断し、調査区全域のほぼ２／３を占める。断面は両岸でゆるやかな傾斜で下がり、中央部で急激に深くなっている。最深部の深さは現水田から約2.5ｍである。最深部より縄文時代晩期～弥生時代前期の土器と木器、中層より弥生時代中期、上層より弥生時代後期の土器が出土した。さらに上面では古墳時代後期の須恵器が出土した。

8．まとめ

調査区の南西から北東にかけて自然旧河道を検出し、南東側の微高地において弥生時代から近世の遺構を検出した。また、旧河道最深部より出土した木器には鋤状木製品があり、初期農耕を示す資料を得ることができた。

（中西）

第２図　調査区完掘状況


第３図　土坑土器出土状況

木太中村遺跡（きたなかむらいせき）

1．所 在 地　高松市木太町
2．調査主体　高松市教育委員会
3．調査期間　平成11年６月１日～８月４日
4．調査面積　1,300㎡
5．調査担当者　大嶋和則、中西克也
6．調査の原因　都市計画道路福岡三谷線建設
7．調査結果の概要

弥生時代では掘立柱建物跡４棟、土坑１基を検出した。時期は後期末である。掘立柱建物跡は２×３間と２×２間があり、ほぼ同方向で規則的に建てられている。土坑は底面より完形の土器が出土し、貯蔵穴と考えられる。

古墳時代では掘立柱建物跡１棟、溝を検出した。掘立柱建物跡は南北に主軸を示し、２×１間である。溝は古墳時代終末期の須恵器の甕や壺・土師器の鉢などがまとまって出土した。

第１図　遺跡の位置（「高松南部」）

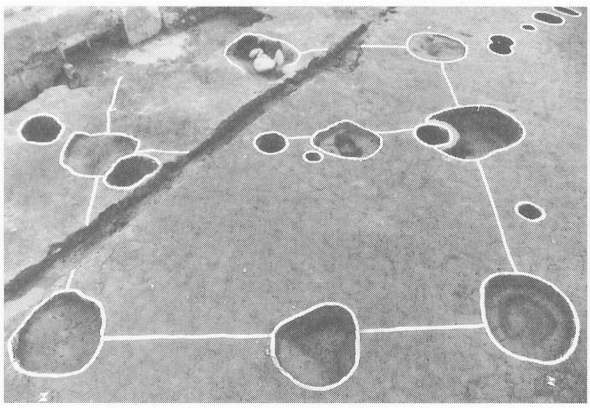
平安時代では柱穴と東西に細長い用途不明の土坑が検出された。柱穴は不規則に検出された。これらの遺構からは、楠葉型の黒色土器、西村産の瓦器椀などが出土した。また、土錘・石錘も出土した。

中世では掘立柱建物跡２棟と条里地割に伴う溝を検出した。掘立柱建物跡は東西方向に主軸を有する２×１間の建物であり、柱穴の規模は小さい。溝は東西方向に延びている。

近世では掘立柱建物跡２棟と多数の柱穴、東西方向の溝を検出した。

8．まとめ

今回の調査では平成10年度の調査区と同様に弥生時代後期～近世に至る多数の遺構が検出された。主な遺構としては、掘立柱建物跡８棟以上、溝、土坑、柱穴、貯蔵穴が挙げられる。これまで、この周辺は原始古代は海であったと想定されていたが、調査の結果、弥生時代後期の集落が確認され、当時の海岸線は江戸時代初期とほぼ同位置であったと考えられる。（中西）



第２図　掘立柱建物跡完掘状況

第３図　貯蔵穴土器出土状況

宗高坊城遺跡（むねたかぼうじろいせき）

1．所 在 地　高松市林町
2．調査主体　高松市教育委員会
3．調査期間　平成10年３月23日～
　　平成11年９月17日
4．調査面積　約4,058㎡
5．調査担当者　小川　賢
6．調査の原因　都市計画道路福岡三谷線建設
7．調査結果の概要

第１図　遺跡の位置（「高松南部」）

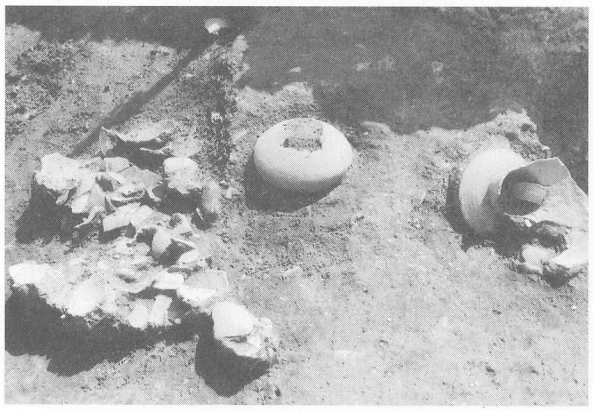
本遺跡は、空港跡地～高松東道路間を繋ぐ道路建設工事に伴い確認されたもので道路建設予定地の北部、南部を除く約350mの区間について調査を行った。

調査範囲のほぼ中央部には、幅約100m程の埋没した自然河道が存在し、その南北は微高地となる。この自然河道の両岸においては弥生時代後期の遺物が大量に出土した。北岸付近では、洪水層と見られる砂混じりの黒褐色土からほぼ完形の土器や鍬等の加工木が出土している。当時期に該当すると見られる遺構は、微高地上において土坑、溝状の遺構を検出しているが、住居跡等の集落に直接関連するものは検出できなかった。その他旧河道域の下層からは、縄文晩期と見られる凸帯文土器等が数点出土している。微高地上では、中～近世の遺構が主に検出されており、条里方向に合致する溝跡、建物跡、井戸、出水等を確認している。

8．まとめ

本遺跡で確認された自然河道は、林・坊城遺跡の縄文時代晩期から古墳時代の遺物を包含した自然河道に相当するものと考えられる。本遺跡内の微高地上では削平の影響も考えられ弥生時代以前の遺構については希薄であった。また弥生時代の終わりには埋没途上にあったと考えられる河道域内でも畦畔等の水田に関した遺構は検出していない。しかし出土した弥生土器には磨滅が見られず多量であるため、河道の両岸周辺には集落が想定される。中～近世以降には、耕作地や居住地であった箇所において埋没河道の水脈を利用したと考えられる出水、井戸等が多く見られた。

（小川）



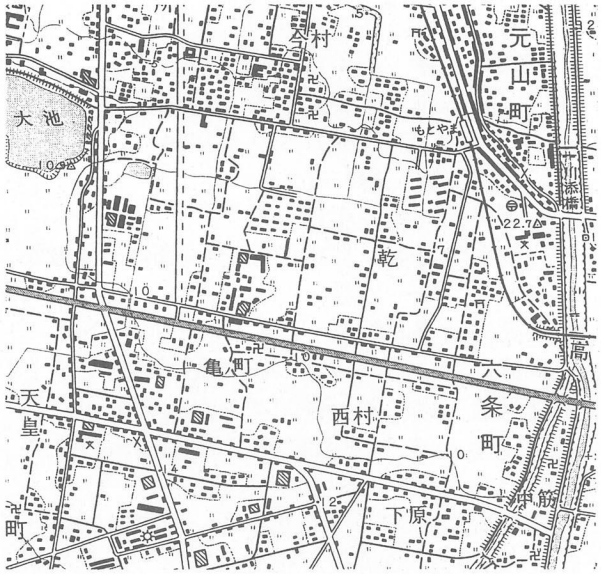
第２図　弥生土器出土状況

第３図　自然河道

林下所遺跡（はやしげしょいせき）

1．所 在 地　高松市林町
2．調査主体　高松市教育委員会
3．調査期間　平成11年12月３日～
　　平成11年12月22日
4．調査面積　約308㎡
5．調査担当者　小川　賢
6．調査の原因　市道林町65号線道路改良
7．調査結果の概要

調査地は高松東道路より北約200m地点にあり、調査は南北方向の現道（農道）の改良工事（道路幅５m、80mの区間）に伴うものである。周辺の地割が乱れることから、近隣する林・坊城遺跡で検出した初期農耕具などが出土した自然河道が想定されること、また近年周辺の調査において弥生～古墳時代の生活痕が確認されていることから事前に試掘調査を行った。

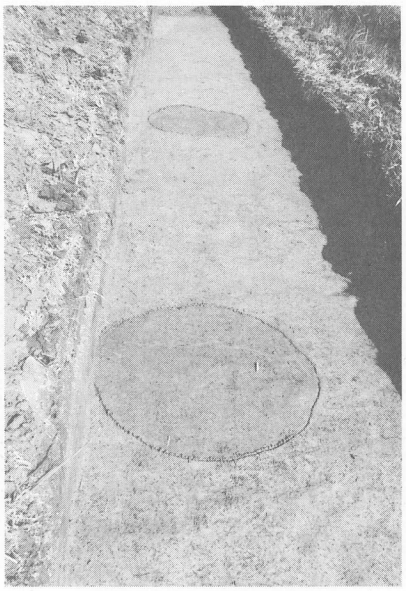


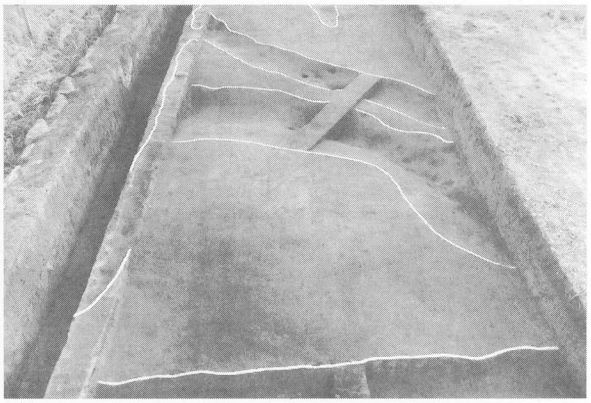
第１図　遺跡の位置（「高松南部」）

試掘調査の結果としては、弥生土器、土師器、須恵器片が出土し溝状遺構及び柱穴跡を検出した。本調査対象地は現有の東西方向コンクリート畦畔を境に北半が低くなっているが、ほぼ現耕作土直下、地下約30cmの黄褐色砂質土層上面で、南半では安定した明黄褐色粘土層上面において遺構を検出した。検出された主な遺構は、掘建柱建物跡、溝状遺構、井戸跡等である。出土した土器は小片が多く時期決定には今後の整理が必要である。概ね弥生時代後期～古墳時代に該当するものと考えられる。

8．まとめ

今回は幅４mという狭い調査区であったが、弥生時代後期～古墳時代の生活面を確認することができた。当初想定していた自然河道は本調査区の西部を流れていたものと考えられ、これより東では当時期の生活痕跡が比較的良好に残存する可能性が考えられる。　（小川）

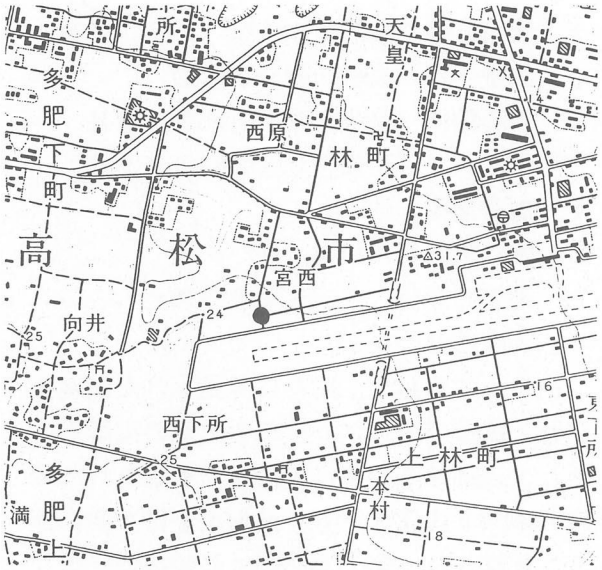

第２図　柱穴検出状況


第３図　調査区中央部　溝状遺構

宮西（みやにし）・一角（いっかく）遺跡（いせき）

1．所 在 地　高松市林町
2．調査主体　高松市教育委員会
3．調査期間　平成12年２月17日～23日
4．調査面積　75㎡
5．調査担当者　川畑　聰
6．調査の原因　市道林道47号線道路改良
7．調査結果の概要

宮西・一角遺跡は、国指定重要文化財「弘福寺領讃岐国山田郡田図」南地区比定地内に所在し、同田図関連遺構・遺物の出土が予測される地域である。



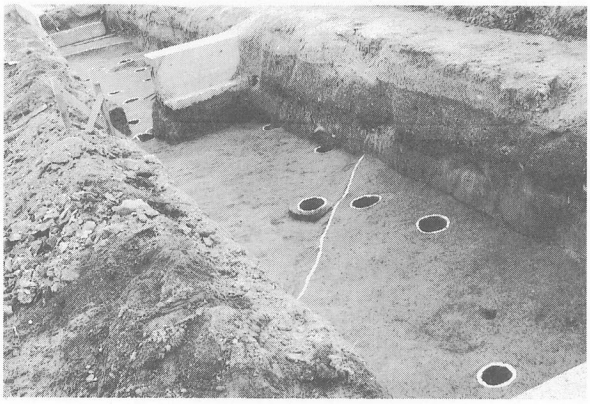
第１図　遺跡の位置（「高松南部」）

東西にのびる市道北側拡幅部分の延長約40ｍを調査した。その結果、溝跡６条、柱穴23個、土坑２基の遺構を検出した。これらの遺構は、出土遺物より弥生時代前期末～江戸時代と考えられる。弥生時代前期末では、土器廃棄坑である土坑１基を検出し、過去の調査例と合わせて当該時期の集落の範囲が明らかになりつつある。鎌倉時代頃では、現在の条里地割と方向が同じである溝跡を５条検出した。これら溝跡は道路南側拡幅部分で確認した溝の続きであり、今回の調査で溝がのびる方向を特定することができた。室町時代～江戸時代にかけても、条里地割と同じ方向をもつ溝跡１条を検出した。柱穴は、掘立柱建物を復原できるほど並列していなかったが、所属時期は出土遺物より鎌倉～江戸時代と考えられる。

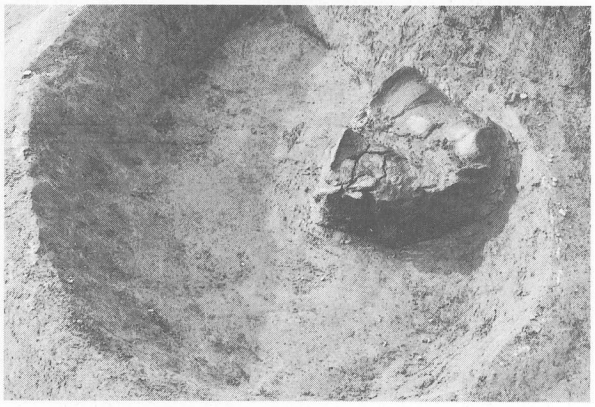
8．まとめ

今回の調査では、田図関連遺構・遺物を確認できなかったが、この地域の条里地割が鎌倉時代頃までは確実に遡ることが明らかになった。今後の調査により、田図が描かれた奈良時代にまで遡る資料が出土することを期待したい。

（川畑）



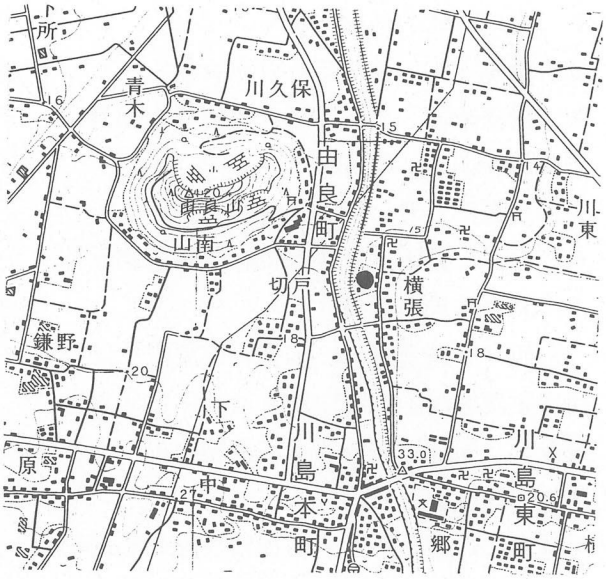
第２図　遺構完掘状況



第３図　弥生時代前期土坑遺物出土状況

由良南原遺跡（ゆらなんばらいせき）

1．所 在 地　高松市由良町
2．調査主体　高松市教育委員会
3．調査期間　平成11年７月26日～27日
　　平成11年８月17日～23日
4．調査面積　130㎡
5．調査担当者　川畑　聰
6．調査の原因　市営住宅建て替え
7．調査結果の概要



第１図　遺跡の位置（「高松南部」）

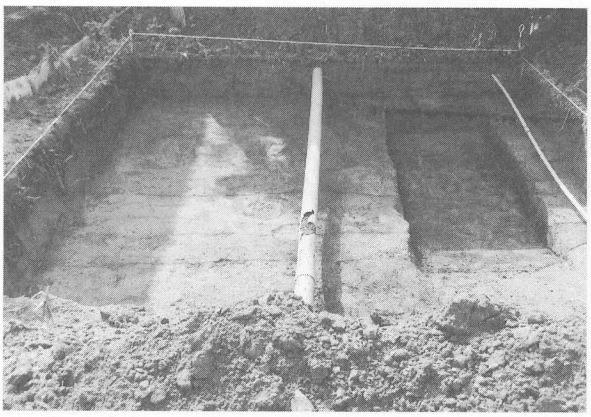
由良南原遺跡は、新たに発見された埋蔵文化財包蔵地である。春日川中流域の東岸に位置し、遺跡はこの春日川により形成された埋没旧中洲上に立地する。試掘調査は２回に分けて実施した。第１次調査は機械掘削により調査地の地形や遺物の有無を確認し、第２次調査では、人力掘削により遺構の検出を行った。

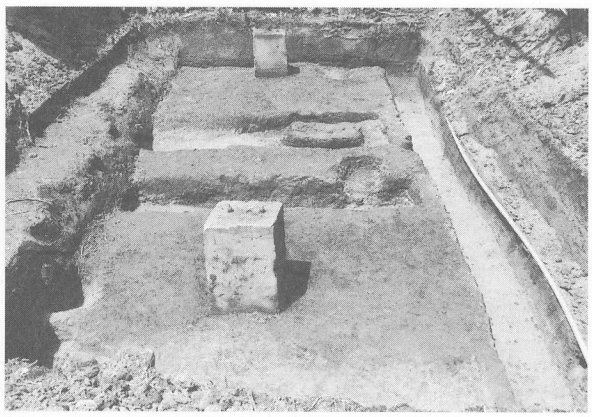
調査の結果、川東市営住宅敷地において、西半分が埋没旧中洲（微高地）であり、東半分が旧河道であることが判明した。この旧河道は、付近の地形分析とあわせて春日川の旧流路と考えられる。一方、埋没旧中洲上では、黒褐色粘質土の遺物包含層を確認するとともに、溝跡４条、柱穴７個、土坑２基の遺構を検出した。これらの遺構は、出土遺物より鎌倉～室町時代を中心とするものと考えられる。注目すべき遺物としては、焼土塊と鉄屑が溝跡より出土しており、この場所において、鉄器製作が行われていた可能性が指摘できる。

8．まとめ

由良南原遺跡については、埋蔵文化財包蔵地と認められる。また、当該遺跡は、中世城館であった由良城が北方に近接し、由良山城が春日川を挟んだ対岸にあったこと、鎌倉～室町時代にかけての土器片が出土したことから、両城に関係した施設が所在していた可能性が指摘できる。

（川畑）

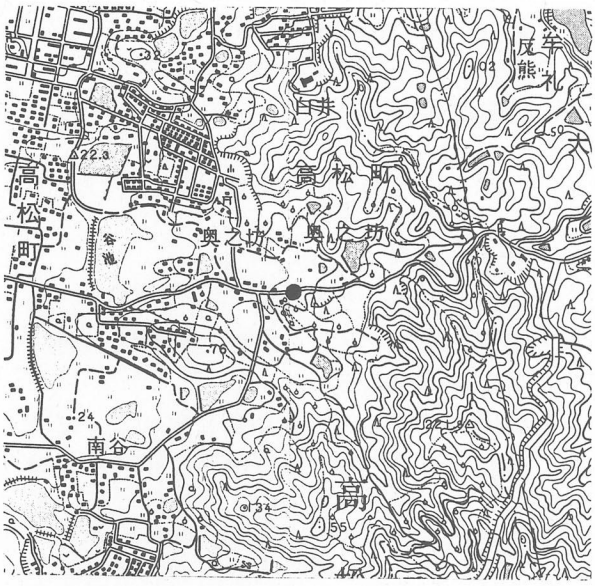

第２図　微高地中央付近トレンチ全景


第３図　微高地北端トレンチ全景

大空北遺跡（おおぞらきたいせき）

1．所 在 地　高松市高松町
2．調査主体　高松市教育委員会
3．調査期間　平成11年４月12日～７月13日
4．調査面積　2,200㎡
5．調査担当者　大嶋和則
6．調査の原因　高松市東部運動公園（仮称）
7．調査結果の概要

遺跡は高松市東部の龍王山塊からいくつも西に派生する丘陵上に立地し、奥の坊遺跡と谷を隔てて向かい合うような位置である。遺跡の所在する丘陵の南側には弥生後期の標式遺跡として知られる大空遺跡が所在する。



第１図　遺跡の位置（「高松南部」「志度」）

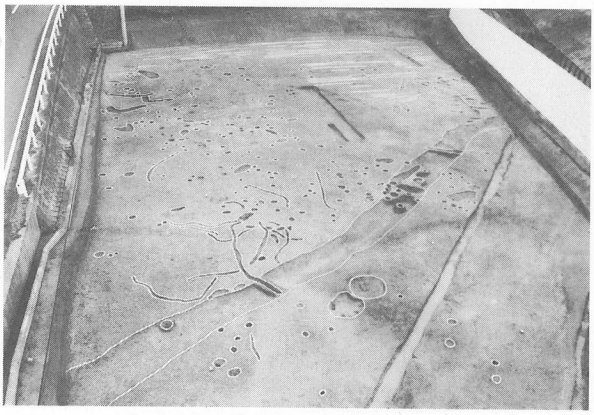
試掘調査では縄文後期の土器片が２点出土していたため、同時期の遺構の存在が期待されていたが、明確な遺構は見られず、遺物も出土しなかった。遺跡の時期は概ね弥生中期前半、古代、近世～近代の３時期である。遺物は少量で、コンテナ２箱分しか出土していない。

弥生中期前半では幅約２ｍ、検出長約30ｍの溝を検出した。溝の東側に同時期の遺構を多数検出した。削平が著しく、明確な居住遺構は見られなかったが、炉跡と考えられる焼土混じりのピットを検出していることから、竪穴住居が所在していたことがうかがえる。古代では遺跡の北端で東西方向の溝を数条検出した。近世～近代では土坑と、犂溝群を検出した。

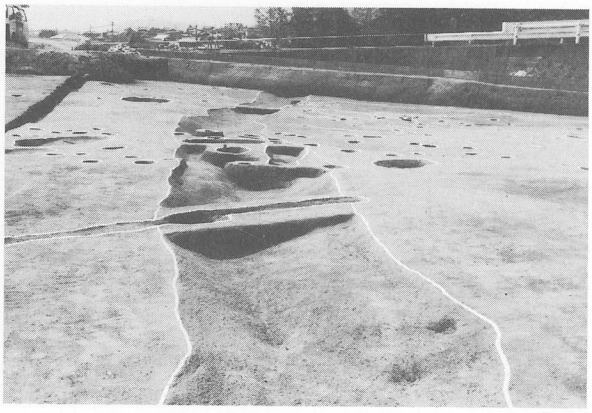
8．まとめ

現在切り崩されて存在しないが、遺跡の南側には尾根が所在し、東側の尾根との間の谷部分に立地する。同時期の遺跡である奥の坊遺跡と同様な立地状況である。丘陵部の遺跡の立地状況として普遍性が指摘できる。奥の坊遺跡が南向きの斜面に立地するのに対し、北向きの斜面に立地する点が異なる。また両遺跡はその距離約100ｍと狭く、時期的にも接点が見られることから、相互に関連すると考えられる。

（大嶋）



第２図　Ⅰ区完掘状況

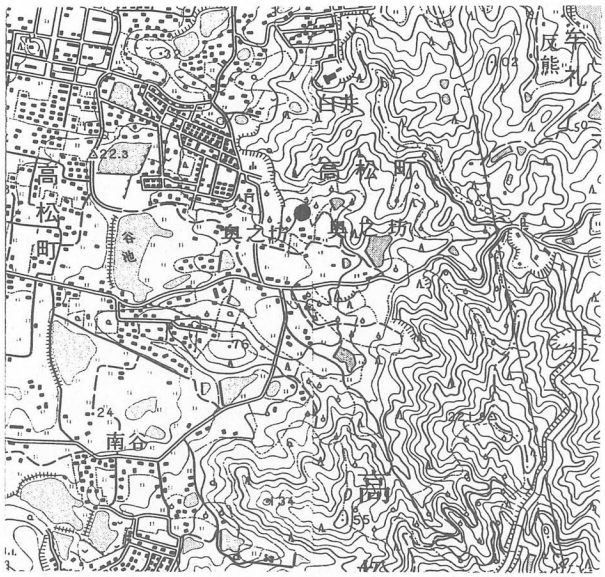


第３図　溝完掘状況

奥の坊遺跡

1．所 在 地　高松市高松町
2．調査主体　高松市教育委員会
3．調査期間　①平成11年６月８日～７月13日
　　②平成11年11月10日～12年３月３日
4．調査面積　①700㎡②2,300㎡
5．調査担当者　大嶋和則
6．調査の原因　高松市東部運動公園（仮称）
7．調査結果の概要

平成10年度に引き続き調査を行った。11年度の調査は10年度調査地の西側と北側の２箇所で、年度の前半と後半の２回に分けて調査を実施した。前半の調査地では弥生中期前半～奈良時代と近世～近代の２時期の遺構面を検出した。方形周溝状遺構１基、竈付の竪穴住居１基等が見られた。



第１図　遺跡の位置（「高松南部」「志度」）

後半の調査では弥生中期前半の集落を検出した。出土遺物は多く、コンテナ約180箱分にのぼる。昨年度同様、石器の出土量が多いことも注目できる。また、包含層中からではあるが、器高が１ｍを越す弥生土器が出土している。

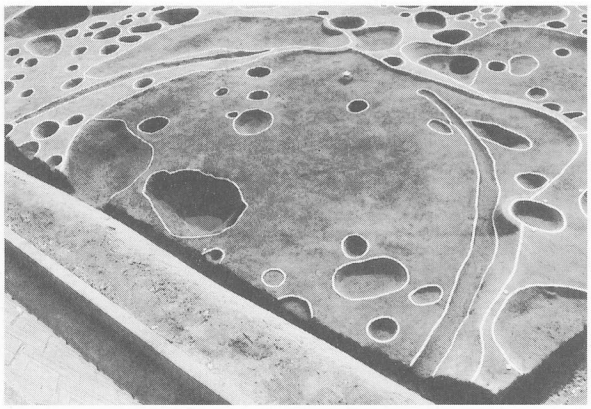
遺構は竪穴住居、溝、土坑、柱穴等が密集した状況がうかがえた。竪穴住居は20棟余り検出しており、中には焼失家屋も見られた。また、松菊里型住居も１棟検出した。さらに調査地の北東端部分では方形周溝状遺構１基が見られた。

8．まとめ

調査の結果、平成10年度調査地の北半から平成11年度後半調査地部分が集落の中心部と考えられ、多数の竪穴住居を検出した。特に焼失家屋で、屋根材の上面で焼土塊を検出しており、屋根に盛土を行っていた可能性を指摘できる。また、焼失家屋の遺物は炭・焼土層の上部からまとまって出土した。その中に分銅形土製品が存在することも注目できる。

分銅形土製品は包含層中や竪穴住居埋土から５点出土している。いずれも方形やバチ形を呈するもので、分銅形土製品の祖形と考えられる。（大嶋）

第２図　焼失家屋



第３図　松菊里型住居

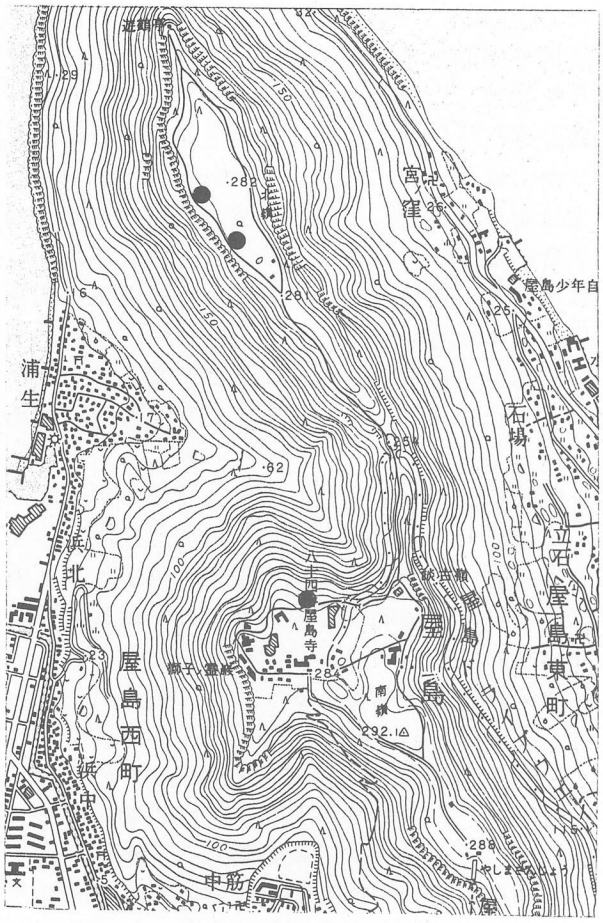
史跡天然記念物屋島（しせきてんねんきねんぶつやしま）

1．所 在 地　高松市屋島西町，屋島東町
2．調査主体　高松市教育委員会
3．調査期間　平成12年２月８日～
　　平成12年３月30日
4．調査面積　360㎡
5．調査担当者　山元敏裕
6．調査の原因　史跡天然記念物屋島に所在する遺跡の把握
7．調査結果の概要

平成11年度の発掘調査では南嶺（第１調査地点）２箇所、北嶺（第２調査地点）２箇所で確認調査を行った他、屋島全域の分布調査を実施し、遺構の確認を行った。

(1)第１調査地点

南嶺北斜面に存在する幅２ｍの帯状平坦地東端において、平坦地に直交する様に設定したトレンチと帯状平坦地の中間地点に存在する折れ部分に設定したトレンチについて調査を行った。調査の結果、両トレンチとも平坦地の現地表面から１ｍ程度の深さで安山岩の風化土と安山岩の小礫で充填されていることが判明した。また、調査前は平坦地前面に石垣が埋没しているものと想定していたが、調査の結果、石垣は存在しないことが判明した。この結果から、帯状平坦地前面の斜面部分について、石垣が構築されている部分とそうでない部分が存在することが判明し、現時点では斜面部に石垣が存在する部分は、他の帯状平坦地に比べ高く構築されている部分についてのみ認められる。



第１図　遺跡の位置（「高松北部」）

出土遺物は東端に設定したトレンチから甕の体部片と思われる破片が１点出土した。調整、焼成等から古代前半頃のものと考えられるが、細かな時期の特定には至っていない。

第２図　第１調査地点　第２トレンチ完掘状況

第３図　第１調査地点　第３トレンチ完掘状況

折れ部に設定したトレンチでは弥生土器壺口縁部片が１点出土したのみである。

(2)第２調査地点

北嶺北側に所在する湿地の西側で平成10年度の調査で確認した石列遺構の広がりを確認するため、南北にトレンチを設定したほか、北嶺中央部芝生広場の北側に十字のトレンチを設定し、遺構の確認調査を実施した。湿地の西側に設定したトレンチからは、昨年度確認した石列の延長を確認したほか、遺構には伴わないものの、７世紀第２四半期頃のものと考えられる壺の底部や弥生時代後期の壺口縁部も出土した。昨年度確認した石列は南北とも完結し規模は、南北５ｍ、東西1.8ｍである。石列の性格については、標高の低い部分に堰状に構築されている訳ではなく、埋土に版築状の突き固めた土層も確認できない。西側は列になるが、東側は列をなさないことから長方形の基壇とも考えられない。現在のところ石列の性格は不明であるが湿地に近接して構築されていることから湿地に関係する遺構の可能性が考えられる。

芝生広場北側に設定したトレンチからは、遺構は確認できなかったものの、９～10世紀にかけての瓦を含む遺物を多量に確認した。出土した多量の遺物の性格については、平成12年度に本トレンチの西側で確認調査を実施する予定であるので、その成果を待って判断したい。

(3)分布調査

発掘調査と一部平行して行った分布調査では、南嶺東斜面で地形が緩斜面から急斜面に変化する地点で、これまで南嶺北斜面（平成11年度第１調査地点)、南嶺西斜面で確認されているものと同様な幅２ｍの帯状平坦地を確認した。確認した範囲は南北約50ｍの範囲において、谷を取り囲むように連続していることが確認できた。これまで確認されたものと同様に、緩斜面から急斜面に変化する部分で確認したこと、谷を取り囲むように構築されていること、平坦地の前面に石垣が認められることなど共通点が多いことから、確認した遺構は詳細な調査を経なければならないが、屋島城に関係する遺構の可能性が考えられる。

北嶺での分布調査では、芝生広場の北側で基壇をもつ礎石建物、その北側で集石遺構を確認したほか、この遺構の北北東方向に80ｍで長方形の石積み基壇を確認した。これら確認した遺構は平成12年度以降に確認調査を実施し、遺構の性格を確認する予定である。

平成11年度の史跡天然記念物屋島の調査成果については、『高松市内遺跡発掘調査概報－平成11年度国庫補助事業－』2000年３月にその一部を報告しているので参照されたい。（山元）

第４図　第２調査地点石列完掘状況

第５図　南嶺東斜面確認外郭線現況

龍満城跡（りゅうまんじょうあと）

1．所 在 地　香川郡香川町大字川東下字西立満
2．調査主体　香川町教育委員会
3．調査期間　平成11年11月８日
　　～平成11年12月22日
4．調査面積　57.6㎡
5．調査担当者　向井敏伸
6．調 査 指 導　県教委文化行政課森格也
7．調査の原因　水路改修工事
8．調査結果の概要

第１図　遺跡の位置（「川東」）

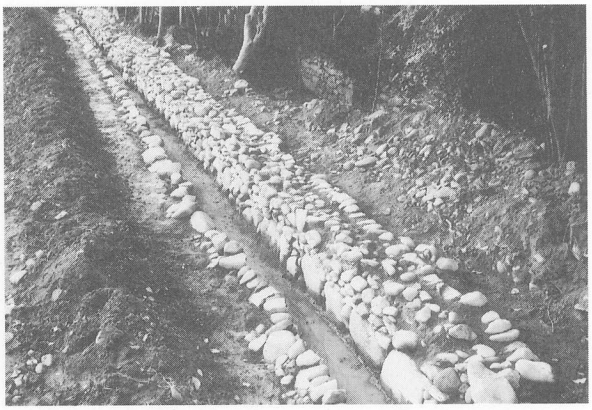
龍満城跡は香川町の中央部分の、香東川の東岸部分の沖積地に位置し、標高は72.5m前後である。調査区は、南北1.8m、東西32.0mと東西に細長く面積は57.6㎡である。調査区の北側には現在の薬師庵の土塀が残っている。この薬師庵の本殿前には２基の宝篋印塔が残っており、文政10年（1828年）の銘が残されている。現在残っている土塀もこの当時のものの可能性が高く、また土塀の頂部には瓦が一部残っており、軒平瓦の瓦当文様から判断して江戸時代のものと考えられたので、土塀の立面図を作成した。この土塀の下部には土塁と考えられる高まりと石垣状の石列が認められた。

遺物については、主に土塀と石垣の中から出土した。陶磁器類、瓦質土器、土師器、瓦があり、量的には瓦が最も多く、コンテナで18箱分ある。

9．まとめ

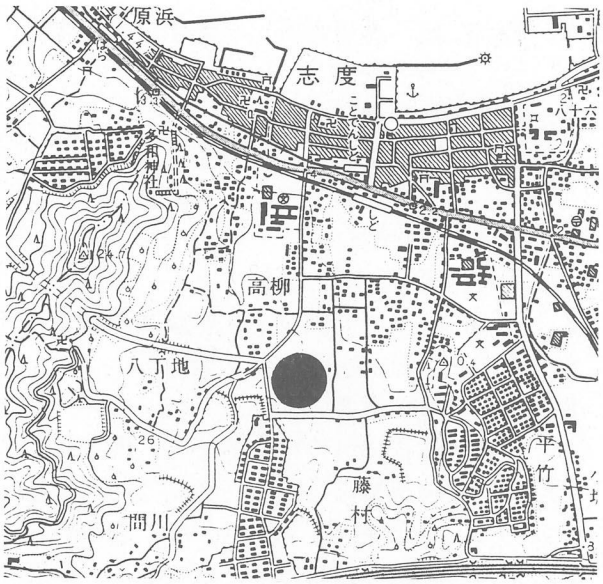
小規模な発掘調査であったが、初めての「龍満城跡」の本格的な調査であった。調査の結果、現在も残る薬師庵の土壁の下にある石垣は、出土遺物から江戸時代末期（19世紀前半）に構築されたものであることが判明した。さらに、この石垣を造る以前には土塁が巡っていたことも判明した。今回、龍満城跡の一部を調査したが、このような小規模な調査の積み重ねにより、龍満城跡を含めた中世城館跡の研究が一層進むものと考えられる。（向井）

第２図　調査地遠景


第３図　石垣検出状況

花池尻中遺跡（はないけじりなかいせき）

1．所 在 地　大川郡志度町志度字花池尻地内
2．調査主体　志度町教育委員会
3．調査期間　平成11年９月６日～９月10日
4．調査面積　約240㎡
5．調査担当者　大川広域　阿河鋭二
6．調査の原因　民間大型店舗建設
7．調査結果の概要



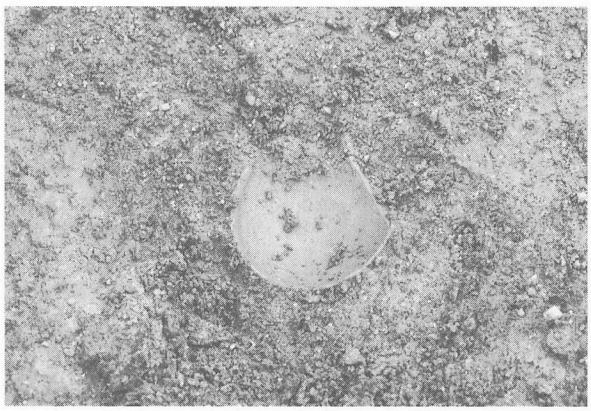
第１図　遺跡の位置（「志度」）

志度町の南西部に位置する藤村地区において民間による大型店舗建設が計画された。町教育委員会では開発面積が広大かつ、周辺の遺跡分布状況などから遺跡の所在が予想されたため、埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査をおこなった。調査地は志度平野の西端に位置し、町道間川線と藤村西線が交差する地点の北東側水田域にあたる。開発対象地内のほとんどを平地が占めるが、北西隅は微高地状を呈した緩斜地となっている。また、最高所と最低所との比高差は約７ｍをはかる。調査は建物予定地に計17本のトレンチを設定した。このうち１～10トレンチは傾斜地、11～17トレンチは平地に相当する。この結果、３～10トレンチを主とする傾斜地からは土坑や溝、柱穴などの遺構がまとまって検出された。３トレンチでは床土直下で５基の土坑、８～10トレンチでは幅１～1.2ｍの溝などがあり、７世紀頃の坏・甕や竈などの須恵器や土師器が出土している。これに対し11～17トレンチでは全体的に砂礫質土が厚く堆積しており、中世前半の陶磁器片が出土したほかは明確な遺構面は確認されなかった。

8．まとめ

今回の試掘調査では７世紀代を中心に中世前半を含む遺構・遺物が検出された。これまでに隣接する花池尻遺跡や花池尻北遺跡においても当該期の溝や建物跡などが検出されており、一体の集落遺跡として把握することができる。なお、基礎工事が影響する範囲については12年度に発掘調査を実施する予定である。

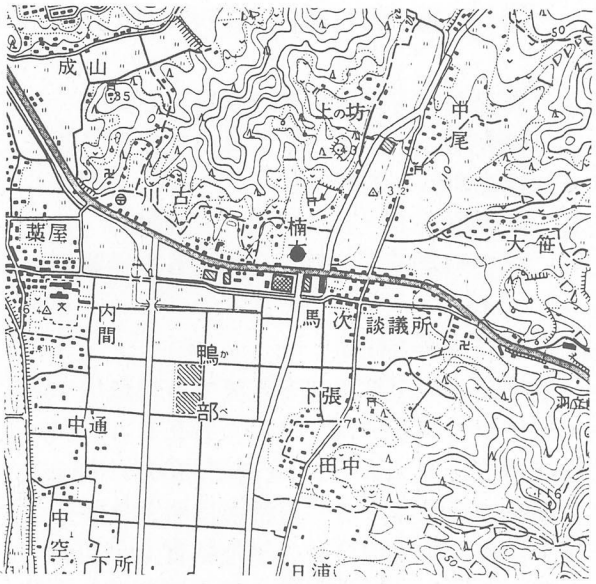
（阿河）


第２図　Ｔｒ－３須恵器出土状況

第３図　Ｔｒ－５遺構検出状況

楠（くすの）木（き）地（ち）区（く）

1．所 在 地　大川郡志度町大字鴨部地内
2．調査主体　志度町教育委員会
3．調査期間　平成12年３月６日～３月７日
4．調査面積　約58㎡
5．調査担当者　大川広域　阿河鋭二
6．調査の原因　町道馬次下大井線新設工事
7．調査結果の概要



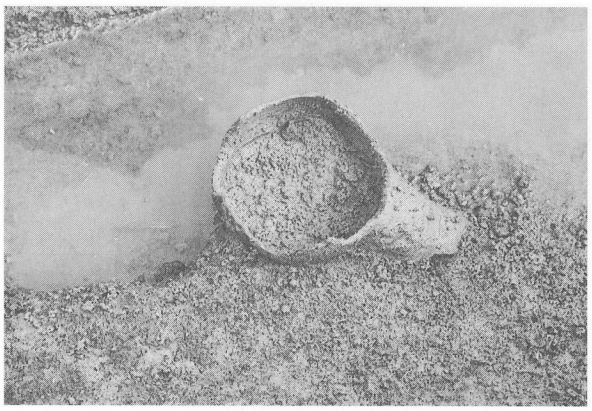
第１図　遺跡の位置（「志度」）

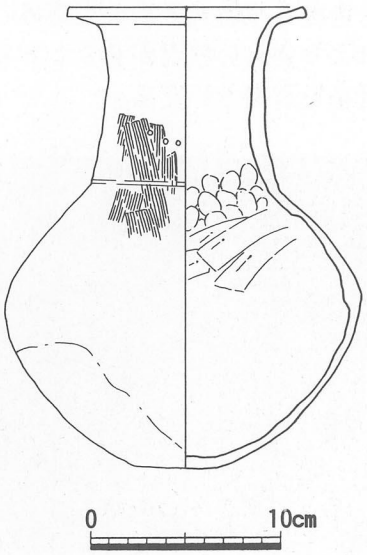
調査地は志度町の東半を占める鴨部平野の北端に所在する。国道11号線と北側山塊との間に位置し、地形的には南流する鴨部川の支流による氾濫原地帯にあたる。海抜高はだいたい７ｍ前後である。今回は条件整備が完了した箇所のみ試掘調査を行った。

水田３筆について計４箇所の試掘トレンチを設定した。国道沿いの１・２トレンチは暗青灰色・オリーブ黒色系の粘質土と砂質土とが、北側の３・４トレンチでは黒色・青灰色粘質土と灰色砂礫質土とが交互に堆積しており、土層の堆積状況から滞水と流水を繰り返していたと考えられる。出土した遺物は僅かである。１トレンチにおいて、地表下約60cmの青灰色礫混粘質土層から須恵器小片が出土している。また、３トレンチからは地表下約50cmの灰色粗砂層上面にてほぼ完形の弥生土器が１点単独で出土した。口径12.3cm、器高24.6cm、外面明黄褐色を呈する広口壺である。調整は外面ハケ目、内面ユビオサエ・ヘラケズリが顕著で、頸部外面には竹管文を施している。胎土は砂粒を多量に含み、体部下半外面には黒斑がみられる。底部は丸底化傾向にある。遺構については各トレンチとも明確に確認することはできなかった。

8．まとめ

今回出土した弥生土器はほぼ完形で摩耗も少ないことから、それほど距離を経ていないものとおもわれる。鴨部平野東側には弥生時代後期から古墳時代にかけての鴨部南谷遺跡が所在しており、調査地周辺にも同様な集落遺跡の存在が窺われる。　（阿河）

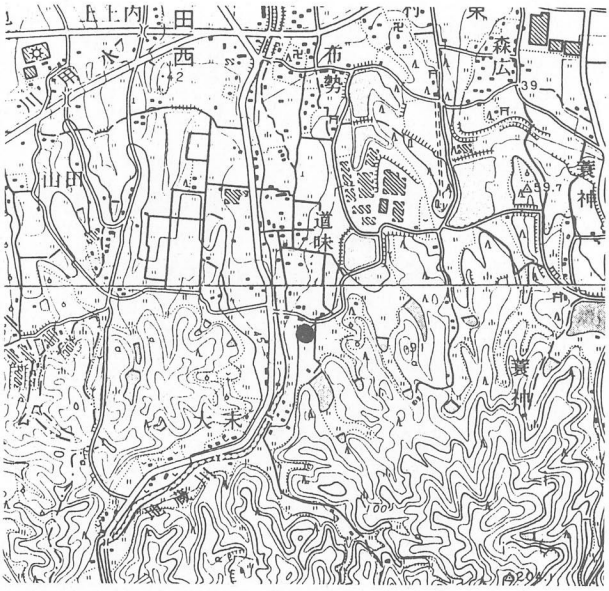

第２図　Ｔｒ－３弥生土器出土状況



第３図　Ｔｒ－３出土土器

道味遺跡（どうみいせき）

1．所 在 地　大川郡寒川町石田西字道味3431
2．調査主体　寒川町教育委員会
3．調査期間　平成12年２月14日～２月28日
4．調査面積　約180㎡
5．調査担当者　大川広域　阿河鋭二
6．調査の原因　土地改良による圃場整備事業
7．調査結果の概要



第１図　遺跡の位置（「志度・鹿庭」）

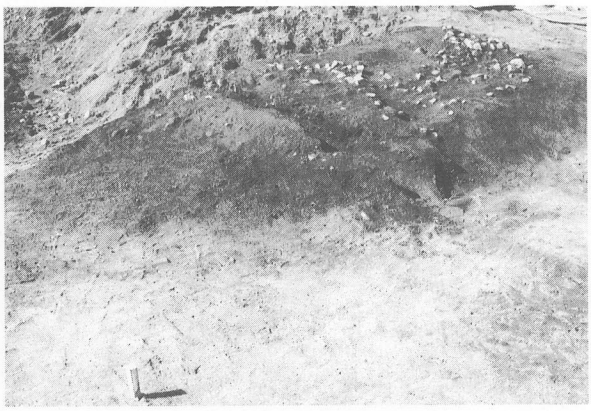
調査地は寒川町西部を北流する地蔵川中流東岸にひろがる砂礫台地上に所在し、海抜高は49m前後をはかる。地表下約80～100cmで遺構検出面に達する。遺構面は明黄色砂質土で上層には遺物包含層の黒色粘質土が20cmほど堆積している。遺構面は西北側が僅かに高く、周囲にむけて緩やかに傾斜している。検出された遺構はそれほど多くなく、土坑・柱穴少数のほかに竪穴住居跡１棟と集石状遺構１基がある。竪穴住居跡の残存状況は良くなく、検出面においてほぼ床面で中央穴と柱穴、部分的に周溝が検出された。平面形は楕円形、規模は長径420cm前後とおもわれる。集石状遺構は東半分のみの検出であるが、規模は南北約６m、東西約2.8m、中央部の高さ約0.3mを測る。盛り上がりは石礫や土器が著しい集積状態にあるものではない。土層は上下２層に細分できるが、下層は落ち込み状の堆積状況を示し、石礫・土器とも上層に比べ少量である。遺物では土器のほかに石庖丁・石鏃が出土している。

8．まとめ

森広遺跡群など著名な遺跡が数多く所在する寒川町において道味地区は遺跡が少なく、周辺では大末古墳群・道味古墳などが知られているにすぎない。今回の調査では狭小ながらも竪穴住居跡を含む弥生時代後期の集落域の一端を確認することができた。遺構の時期・性格などについてはより詳しい検討が必要であるが、当該期における町内の遺跡の立地と変遷を考えるうえでの貴重な資料といえる。

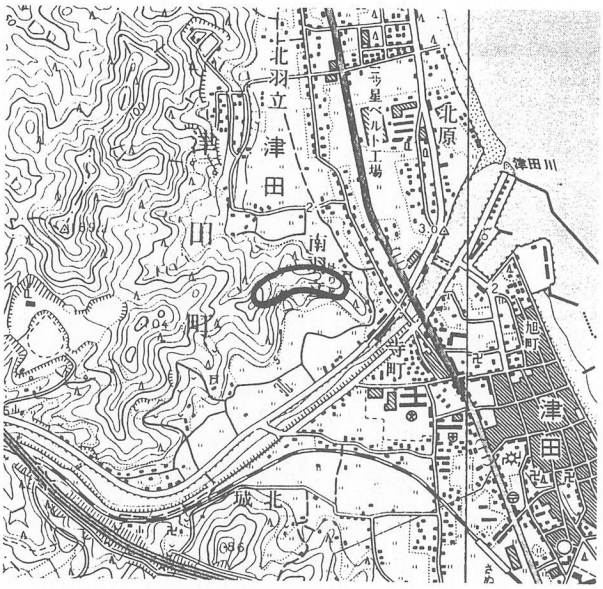
（阿河）

第２図　竪穴住居跡完掘状況


第３図　集石状遺構検出状況

岩崎山古墳群

1．所 在 地　大川郡津田町津田字南羽立
2．調査主体　津田町教育委員会
3．調査期間　平成12年２月１日～２月15日
4．調査面積　約17㎡
5．調査担当者　大川地区広域行政組合
　　萬木一郎・阿河鋭二
6．調査の原因　遺跡範囲確認調査
7．調査結果の概要



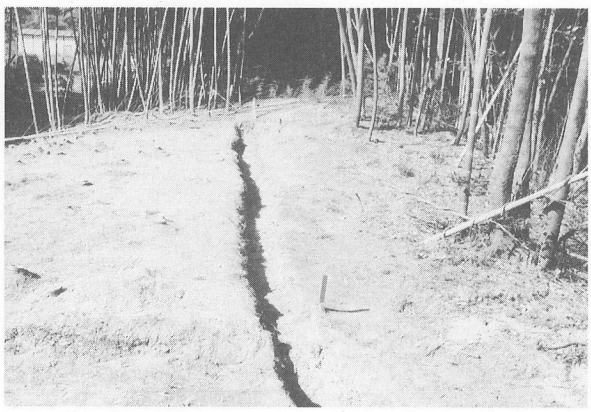
第１図　遺跡の位置(「讃岐津田・志度」)

今回、岩崎山古墳群についての現状を把握するため確認調査を実施した。津田湾沿岸には多くの前期古墳が所在しており、岩崎山古墳群のほかにも鵜部山古墳・赤山古墳・龍王山古墳などがよく知られている。岩崎山古墳群は志度町との境をなす山塊から派生する丘陵東端に位置する。古墳群は前方後円墳の４号墳と４基の円墳からなり、西から１号・２号・３号・５号・４号墳とつづく。１号墳は標高約65ｍの尾根頂部に位置し、箱式石棺が２基確認されている。４号墳は鞍部をこえた標高約35ｍほどの小ピーク上に所在し、前方部を東に向け墳長49ｍをはかる。５号墳は３号墳と４号墳との中間傾斜地に位置し、昭和57年度に不時発見され調査が行われた。３号墳は詳細不明のままますでに消滅している。

調査は１・２号墳については、周辺の草刈り後に目視による地表面観察を行った。この結果、１号墳で確認された箱式石棺は１基のみで、南棺とおもわれる。２号墳については墳丘や主体部を確認することはできなかった。また、５号墳と４号墳の間に試掘トレンチを設定した。トレンチ東端は４号墳後円部推定裾部に相当するとおもわれたが、開墾などによる地形改変から墳裾の範囲を特定できる資料は得られず、表土より埴輪片が数点出土したにとどまる。また、５号墳についても同様に確認できなかった。戦後すぐの調査から半世紀が経過しており、古墳群及び周辺の状況も大きく変化している。岩崎山古墳群の史料的価値の高さを鑑みると、再整理とさらなる充実がのぞまれる。

（阿河）

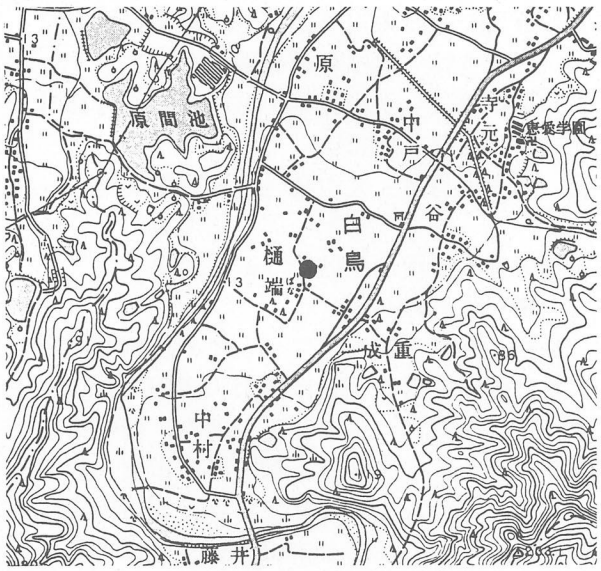
第２図　１号墳主体部


第３図　トレンチ状況

成重遺跡（なりしげいせき）

1．所 在 地　大川郡白鳥町白鳥成重
2．調査主体　白鳥町教育委員会
3．調査期間　平成11年９月16日～11月30日
4．調査面積　約75㎡
5．調査担当者　大川地区広域行政組合
　　阿河鋭二
6．調査の原因　横断道関連配水管埋設工事
7．調査結果の概要

今回の調査は昨年度に実施した発掘調査範囲の西側延伸部分に該当する。昨年同様に四国横断自動車道建設に伴う調査区南側沿いの南北約３ｍ、東西約25ｍの区間について調査をおこなった。



第１図　遺跡の位置（「三本松」）

基本土層序の現地表下約30～50cmは家屋などによる整地層となっている。この整地層下が層厚約20～100cmをはかる黄橙色洪水砂礫層の第１遺構面で、上面にて近世の遺構を検出した。　第１遺構面を形成する黄橙色洪水砂礫層は調査区中央付近が最大厚となり、東西両端にいくほど薄くなり、褐色土の下にもぐり込んでいる。砂礫層下約40cmは灰褐色粘質シルト層・黄褐色砂質層・暗褐色粘質土層が安定的に累積している。さらに遺物包含層の褐灰色巨礫混粘質土層をはさんで褐色砂質土層となる。この土層上面で弥生時代後期の遺構を検出したため、第２遺構面とした。

調査区の狭小さから検出された遺構は多くない。第１遺構面ではピット・土坑数基などで、土坑は陶器や瓦などが廃棄されていた。第２遺構面もきわめて稀薄で、柱穴が数個のみである。

8．まとめ

今回の調査は前年度調査と比較して集石状遺構などは検出されず、内容的にやや乏しいものであった。このように、今年度調査区は湊川の氾濫原に接した成重遺跡の周縁部に相当するものといえる。

（阿河）

第２図　南壁調査状況

3．平成11年度財団法人香川県埋蔵文化財調査センター発掘調査概況

(1) 県事業に伴う調査状況

1．調査の概要

県道・河川関係以外の県事業の概要をまとめる。高松港頭土地区画整理事業は平成10年度から高松港頭地区がサンポート高松と名称変更された。調査事業名もサンポート高松整備に伴う埋蔵文化財発掘調査事業へと変更になった。

平成７年度は都市計画道路予定地の調査900㎡を対象として実施した。最下層で高松城跡築城期の生駒期から幕末までの遺構面を検出し、基本層序を確認した。その結果、対象地内には少なくとも４面の遺構面が存在することが明らかとなった。高松松平藩大老大久保家家紋瓦が出土し、残存する屋敷割図等との大まかな比較・比定が可能となった。翌平成８年度は、７年度の南側の区画整理部の民間換地予定地で、3,639㎡の発掘調査を実施した。西ノ丸外郭の屋敷地が展開する区画では最もまとまった調査となった。江戸後期の城下図によると対象地の西部は大久保家の屋敷地が広がり、東南部は御下馬とされる空間が広がりが描かれている状況を裏付ける遺構を検出した。また東南部から生駒家上級家臣の上坂勘解由の名が見られる木札が出土し、生駒期の屋敷割解明の定点が得られた。平成９年度は平成７年度調査区の東側の旧国労会館の跡地で300㎡の調査を実施した。中世段階において対象地はすでに安定しており、野原庄の一部となる可能性が出てきた。

平成11年度の調査は、平成８年度の民間換地部への移転確定と撤去が終了した箇所とＪＲ四国高松駅ホーム３番線以北の撤去部および都市計画道路の拡幅予定地で合計6,799㎡を対象として調査を開始した。調査着手時点では高松城跡の海側への広がりが確定していなかったことや施設撤去予定時期の関係から高松駅０～２番線部のホーム部は11年度調査対象には含めていなかったが、道路部の切り回し等による調査期間の前倒し確保やその後、明治以降の開発によりすでに消失した箇所が想定以上に広がっていた。そのため調査体制の一部増強も合わせて、新駅舎周辺の大半の箇所を年度内に調査対応実施し今年度の調査面積は9,492㎡となった。今年度の調査では高松城築城期から幕末期までの城域の海側へ４回におよぶ拡張を確認した。また同じサンポート高松整備事業予定地内の民間換地部である浜ノ町遺跡の一部357㎡も合わせて調査することとなった。

2．遺跡別発掘調査の概要（県事業）

遺跡名	所在地	調査面積	調査期間	遺構	遺物
高松城跡	高松市西内町	9,492㎡	平成 11年４月１日 ～ 12年３月31日	石垣 溝 井戸 波止 礎石建物	瓦 磁器 人形土製品
浜ノ町遺跡	高松市浜ノ町	357㎡	平成 12年２月15日 ～ 12年３月31日	溝 土坑	瓦 白磁四耳壺 五輪塔

(2) 県道・河川事業に伴う調査状況

1．調査の概要

平成11年度の県道（県管理国道を含む）河川関係の埋蔵文化財の発掘調査は、香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとの間で平成11年４月１日付けで締結した「埋蔵文化財調査契約」に基づき実施した。当初予定では、県道関係として多度津丸亀線多度津町中東遺跡、大内白鳥インター線大内町原間遺跡、丸亀詫間豊浜線三野町西久保谷遺跡、紫雲出線詫間町須田・中尾瀬遺跡・尾の上遺跡・本村中遺跡、高松丸亀線丸亀市田村遺跡、太田上町志度線高松市多肥宮尻遺跡、中徳三谷高松線高松市上林遺跡、国道438号坂出市川津六反地遺跡、国道193号香南町岡清水遺跡の９路線11遺跡23,335㎡の発掘調査を実施する計画であった。しかし、土木部道路建設課より高松志度線志度町花池尻北遺跡の調査要請があり、西久保谷遺跡の調査にかえて発掘調査を実施し、西久保谷遺跡の発掘調査は次年度送りとなった。また、河川関係としては古川河川改修に伴って大川郡大内町小僧遺跡1,611㎡の発掘調査を実施した。なお、横断道津田引田間の成重遺跡の発掘調査では、同時に県管理国道の国道318号部の調査も実施しているが、概要については四国横断自動車道関係発掘調査概報で報告する。なお、県道紫雲出線須田・中尾瀬遺跡・尾の上遺跡・本村中遺跡と国道193号岡清水遺跡の発掘調査が工事請負方式で実施し、他はセンター直営で発掘をおこなった。

県道関係の遺跡では以下のものがある。多度津町の中東遺跡では、小規模な古墳の周溝と考えられる方形に巡ると考えられる溝を検出した。溝内からは、近接する盛土山古墳と同時期の須恵質埴輪片等が出土しており、盛土山古墳との関係が注目される。大内町の原間遺跡は、四国横断自動車道で調査した原間遺跡の西南に位置し、弥生時代後期から古墳時代にかけての竪穴住居跡や土坑墓を検出した。高松市の多肥宮尻遺跡は平成９年度からの継続した発掘調査で今年度が最終年度となる。当初は用地取得の関係上、供用を急ぐ西側対象地を先行着手し、残地は年度後半に分けて調査せざるを得ない工程であったが、用地取得が見込みより早く進展し他との調査工程の調整がついたため連続した調査となった。調査対象地はその多くが弥生時代中期以降の埋没河川跡で、流路内から木製品等を検出した。詫間町の須田・中尾瀬遺跡では東面する斜面部谷筋で縄文後期の貯蔵穴を検出した。志度町花池尻北遺跡は、同じ県道関係で調査を実施した八丁地遺跡の東に位置し、条里地割に規制された中世の掘立柱建物を検出した。丸亀市田村遺跡は、昨年度側溝部を県教委文化行政課が先行して調査を実施し、梵鐘鋳造土坑が存在することをすでに確認しており、今年度はその大半の部分と鋳造関連施設や田村廃寺の寺院関係の遺構の調査が注目された。調査結果では、平安時代と考えられる残存状況が比較的良好な鋳造土坑全体を検出し、溶解炉壁等がまとまって廃棄された落ち込みを検出した。鋳造土坑内からは撞座鋳型片も出土し、調査区北部では田村廃寺の北端の築地塀の側溝を検出した。高松市上林遺跡は、空港跡地遺跡の南に隣接する遺跡で、条里地割に規制された溝等を検出している。

県管理国道関係から２遺跡を紹介する。坂出市川津六反地遺跡は、平成９年度から調査を実施しており、国道438号関係では昨年度に続いた調査となった。遺跡周辺は条里地割が明確な地域であり、地割に規制された溝跡等を検出している。香南町岡清水遺跡は、香東川が高松平野に入る直前の箇所にあり、西から東に下る緩斜面上に立地し、弥生時代中期後半から後期前半期の竪穴住居跡を検出した。

また、河川関係では、大内町小僧遺跡の発掘調査を実施しており、縄文時代後期以降の埋没河川跡を検出してる。

2．遺跡別発掘調査の概要（県道・河川事業）

遺　跡　名	調査面積	所　在　地	調　査　期　間	遺　　構	遺　　物
中東	640	多度津町奥白方	平成 11年7・8月	古墳周溝 中世墳墓	埴輪片
原間	1,009	大内町川東	平成 11年4・5月	弥生竪穴住居 7世紀土坑墓	土器
多肥宮尻	4,195	高松市多肥上町	平成 11年4月 ～ 9月	弥生埋没河川	土器・木器
須田・中尾瀬、尾の上、本村中	3,672	詫間町詫間	平成 11年4月 ～ 12月	縄文貯蔵穴	土器・石器
田村	650	丸亀市田村町	平成 11年9・10月	古代梵鐘鋳造土坑 築地側溝	鋳型 炉壁 瓦
花池尻北	2,017	志度町志度	平成 11年10月 ～ 12年1月	中世掘立柱建物・溝	土器
川津六反地	1,450	坂出市川津町	平成 11年12月 ～ 12年3月	弥生溝・中世溝	土器
岡清水	5,600	香南町岡	平成 11年4月 ～ 11月	弥生竪穴住居 掘立柱建物	土器
上林	695	高松市上林町	平成 12年2・3月	中世溝	土器
小僧	1,611	大内町川東	平成 12年1・3月	縄文以降埋没河川	土器
成重	258	白鳥町白鳥	平成 11年12月 ～ 12年2月	土坑墓	土器

(3) 横断道事業に伴う調査状況

1．調査の概要

四国横断自動車道のうち高松市内区間及び津田引田間建設に伴う埋蔵文化財調査は平成8年度から開始され、本年度で4年目となった。

高松市内区間の本年度の調査面積は7,904㎡で、昨年度までの実績と合わせると全体（約37,000㎡）の87%が終了したことになる。一方津田～引田間については、本年度の調査面積は21,075㎡で、昨年度までの実績と合わせると全体（約145,000㎡）の99%が終了したことになる

高松市内の横断道関係埋蔵文化財発掘調査対象地は、高松・善通寺間と高松市内区間の2工区に分かれる。当初計画では、西部の高松・善通寺間に該当する遺跡としては香川郡条里B地区（八幡遺跡・中森遺跡)、東部の高松市内区間では香川郡条里C地区・D地区、

前田東・中村遺跡の合計9,116㎡を調査実施する予定であった。この内、調査対象地の用地確保の遅れが建設省施工箇所の香川郡条里Ｂ地区中森遺跡と香川郡条里Ｄ地区で生じたため、その期間を公団施工箇所の香川郡条里Ｂ地区八幡遺跡の調査に振り替えた。

八幡遺跡の発掘調査は、７月～９月と１月～３月の２時期に分けて合計4,315㎡の調査を実施した。調査区の南部では中世の香川郡条里地割の坪界の南北方向の溝とそれに規制された東西の方位を有するやや規模の大きな堀状の溝を検出した。後者の堀状の溝は、その埋土の堆積状況からすると留水状況下で埋没したものとみられ、調査区南端の落ち込みと関連が窺われるが、いずれも遺物をほとんど含まない点が注目される。

中森遺跡は10月～12月にかけて1,563㎡の発掘調査を実施した。国道11号より北側の箇所で中世の屋敷地の一画を検出し、南部では昨年度調査の旧石器ブロックの東側でサヌカイト剥片等が出土した。

香川郡条里Ｃ地区では、126㎡を対象として建物撤去後の調査を実施した。

平成９年度から調査を実施している高松東インターチェンジ建設予定地の前田東中村遺跡は、今年度は1,900㎡の発掘調査を実施した。年度当初の用地取得見込みでは、一部年度後半まで持ち越す危険があったため、年度当初と末に工程を２分していたが、用地取得の進展から連続した調査となった。13,146㎡の発掘調査を足かけ３年で実施し、縄文時代から中世にかけての大規模な複合遺跡の調査が今年度で完了した。

平成12年度は、横断道発掘調査の最終年度であり、高松市田村町以西で、高松市内区間の香川郡条里Ｄ地区2,500㎡と善通寺高松区間の香川郡条里Ｂ地区八幡遺跡の1,542㎡と中森遺跡の752㎡の合計が残るだけとなった。

津田引田間の調査対象となった遺跡は、三殿出口遺跡、金毘羅山遺跡（下屋敷地区）、樋端遺跡、成重遺跡、谷遺跡、善門池西遺跡（池の奥地区）、天王谷遺跡（塩屋地区）、逊田石垣遺跡の８遺跡である。

三殿出口遺跡は昨年度予備調査で弥生時代の遺物包含層等を検出したため、４月から６月までと11月に本調査を実施した。家屋が多く残っていたため撤去時期や工事工程との調整を重ねながらの調査であったが、中世の火葬墓や近世の砂糖竈跡などを検出し、完了した。

金毘羅山遺跡は、平成10年度に平地部と丘陵斜面の一部の調査を実施しているが、今年度の調査は丘陵斜面の残り部分である。12～３月（１月中断）の調査期間で、竪穴式石室２基、土器棺墓４基他を発掘した。

樋端遺跡の本年度の調査はＣ地区南部とＥ地区が対象で、９・10月に実施した。Ｅ地区は家屋撤去後の８月に予備調査を実施した結果、横断道用地南に広がる弥生時代後期の集落跡である神越遺跡はここまでは延びていないことが確認でき、おそらく湊川の氾濫によって遺跡は消滅したものと推測された。一方Ｃ地区の丘陵尾根上からは弥生時代後期と推定される35基の土壙墓群や８基の土器棺墓が検出され、遺物としては懸垂鏡として使用されたと思われる内行花文鏡の破片を検出したことは大きな成果であった。

成重遺跡は遺跡西端一帯と東端の家屋撤去後の３カ所を調査した。６月からは遺跡西端の調査を開始し、弥生時代の集石遺構、竪穴住居跡や中世の集落跡等を調査した。

谷遺跡は家屋撤収後の８月に平地部の予備調査を実施した結果、上下２面の遺構面が検出されたため、９月から成重遺跡の調査と併行して本調査を開始した。上面では中世の掘

立柱建物跡や土坑を検出し、下面では弥生時代の竪穴住居跡２棟、土坑などを発掘した。本年度は、この平地部分2,641㎡と窯跡周辺の一部100㎡を調査し、次年度は丘陵斜面に築かれた近世の陶器窯跡本体900㎡の調査を予定している。

善門池西遺跡は平成９年度から断続的に調査されているが、本年度が最終年度である。中世のピットが多数検出されたが、細長い土坑からは中世の瀬戸焼が出土したことは注目される。

天王谷遺跡は昨年度からの継続調査で、７・８月に実施した。注目できる遺構は13～14世紀のロストル式瓦窯２基で、連珠文軒平瓦や巴文軒丸瓦も出土し、中世瓦生産のあり方を研究する上で貴重な資料となろう。

迯田石垣遺跡は４～６月に実施した。中世の掘立柱建物跡、池状遺構などが検出された。中でも掘立柱建物跡の１棟は四面庇付きの建物に復元でき、この付近に寺があったという伝承と合わせると、遺跡の性格としては中世寺院を求めてもよいかもしれない。
いずれにしても善門池遺跡、天王谷遺跡、迯田石垣遺跡で調査された内容は香川県東部の中世の様子を知る上で貴重な成果である。

以上が本年度の調査概要であるが、次年度には谷遺跡900㎡を残すのみとなった。なお調査の大半は日本道路公団四国支社の委託を受けて実施したものであるが、側道部分の成重遺跡681㎡と樋端遺跡50㎡については県土木部道路建設課の委託を受け、また成重遺跡における国道318号拡幅部分258㎡については県土木部横断道対策総室の委託を受けて実施したものである。

２．遺跡別発掘調査の概要（横断道）

遺跡・地区名	所　在　地	調査面積	調　査　期　間	遺　　構	遺　　物
八幡	高松市檀紙町	4,315㎡	平成 11年７月～９月 12年１月～３月	溝跡 粘土採掘坑	土師器 陶器 染付
中森	高松市檀紙町	1,563㎡	平成 11年10月～12月	古墳周溝 溝跡 掘立柱建物跡	弥生土器、紡錘車、須恵器、土師器
香川郡条里Ｃ	高松市勅使町	126㎡	平成 11年10月		
前田東・中村	高松市前田東町	1,900㎡	平成 11年４月～６月	柱穴、土坑 井戸、自然河川	須恵器、土師器、瓦、黒色土器
三殿出口	大川郡大内町三殿	6,370㎡	平成 11年４月～６月 11年11月	柱穴、土壙墓 近世砂糖竈	弥生土器、須恵器 土師器
金毘羅山	大川郡大内町水主	1,300㎡	平成 11年12月 12年２月～３月	竪穴式石室 土器棺墓 土壙墓	銅鏡、鉄製品
樋端	大川郡白鳥町	1,647㎡	平成 11年９月～10月	古墳、土器棺墓 土壙墓、溝跡	銅鏡、鉄鎌、鉄鏃 ガラス玉
成重	大川郡白鳥町白鳥	4,192㎡	平成 11年６月～ 12年３月	竪穴住居跡 集石遺構 掘立柱建物跡	弥生土器・土師器 石器
谷	大川郡白鳥町白鳥谷	2,741㎡	平成 11年９月～11月 12年３月	竪穴住居跡 土坑、柱穴	弥生土器 土師器、備前焼

遺跡・地区名	所　在　地	調査面積	調 査 期 間	遺　　構	遺　　物
善門池西	大川郡白鳥町谷	1,050㎡	平成 11年８月	溝跡 柱穴、土坑	弥生土器、土師器、須恵器、銅銭
天王谷	大川郡引田町塩屋	1,474㎡	平成 11年７月～８月	ロストル式平窯 土坑、柱穴	土師器、瓦
逊田石垣	大川郡引田町引田	2,300㎡	平成 11年４月～６月	掘立柱建物跡 土坑、柱穴 池状遺構	土師器、須恵器 青磁、鉄製品、瓦

(4) 国事業に伴う調査状況

1．調査の概況

平成11年度の建設省施工国道関係埋蔵文化財の発掘調査は、香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとの間で平成11年４月１日付けで締結した「埋蔵文化財調査契約」に基づき実施した。国道32号関係では綾歌バイパスの綾歌町池下遺跡・北内遺跡の発掘調査と満濃バイパスの満濃町羽間地区・綾歌町室塚地区の予備調査があり、国道11号関係では坂出丸亀バイパスの多度津町小塚遺跡の発掘調査を実施した。

綾歌バイパス池下・北内遺跡は綾歌町栗熊東に所在し、４月～12月で調査を実施した。北内遺跡は前年度からの継続で、縄文時代後晩期～弥生時代にかけての自然流路を検出した。東大東川の西に位置する池下遺跡では、琴平電鉄栗熊駅の東までが調査対象となったが、東部では縄文時代後晩期の自然流路と弥生時代後期から古墳時代前期の溝・井戸を検出した。また中世の集落域は池下遺跡調査対象地中央やや西よりが中心となるようである。掘立柱建物だけではなく、土坑墓も、確実なもので２基検出している。いずれも鵜足郡条里地割方位に規制された南北に主軸をもち、屋敷に隣接して設けられた墓である。なお出土人骨については香川医科大学法医学教室に鑑定を依頼し、残りの良い土坑墓の人骨については17歳前後の男子の可能性が高いとの所見をいただいている。

満濃バイパスの予備調査は、６月に実施した。対象地は満濃町から綾歌町にまたがり、西の満濃町羽間地区では、北に下る緩斜面上で弥生時代後期の集落跡を確認した。また東の綾歌町室塚地区では丘陵上と東端の緩斜面上でいずれも弥生時代の遺構を確認している。対象地東端の室塚地区では、バイパス建設予定地内を香川用水の隧道が走っており、予備調査実施に当たっては水資源開発公団香川用水管理所と事前に協議を行った上で小型の重機による機械掘削を行った。

国道11号坂出・丸亀バイパス関係では多度津町小塚遺跡の発掘調査を４月・５月で実施した。弥生時代後期の土器が多量に廃棄された溝と平安時代前期に遡る可能性のある南北方向の道路状遺構を検出した。道路状遺構は側溝間の上面幅が約６ｍあることと多度郡条里２条と１条の条界に位置することから、南北の幹道の可能性が高い。

2．遺跡別発掘調査の概要（国事業）

遺跡名	所　在　地	調査面積	調 査 期 間	遺　　構	遺　　物
池下遺跡、北内遺跡	綾歌郡綾歌町栗熊東	5,125㎡	平成 11年４月１日 ～ 11年12月31日	縄文時代後晩期自然河川、古墳時代前期井戸、中世掘建柱建物・土坑墓	縄文時代土器・石器 土師器 人骨
小塚遺跡	仲多度郡多度津町葛原	820㎡	平成 11年４月１日 ～ 11年５月31日	弥生時代後期溝、中世	弥生土器 土師器
満濃バイパス羽間・室塚地区予備調査	仲多度郡満濃町羽間 綾歌郡綾歌町室塚	2,000㎡	平成 11年６月１日 ～ ６月30日	溝、土坑	弥生土器

香川県埋蔵文化財調査年報
平成11年度
平成13年３月31日　発行
編集　香川県教育委員会事務局文化行政課
高松市番町２丁目１番10号　ＮＴＴ番町ビル
電話（087）831－1111
発行　香川県教育委員会
印刷　㈱　成　光　社